

青年期における依存性様態の検討

——依存対象に焦点を当てて——

田宮沙紀・岡本祐子

A study on the statuses of dependence in the adolescence
from the viewpoint of dependent objects

Saki Tamiya and Yuko Okamoto

本研究では重要な他者として依存対象に着目し、青年期における依存性様態が心理的適応や依存対象との関係へ及ぼす影響を検討した。研究1では大学生313名を対象に質問紙調査を実施し、依存性様態と主観的幸福感及び依存対象との関係評価の関連を検討した。その結果、互恵的な依存関係を築いている者は主観的幸福感が高く、依存対象との関係評価も良好であること、依存に対して否定的な態度を持つ者は主観的幸福感が低く、依存対象との関係を否定的に評価する傾向が示唆された。さらに、研究2において大学生13名を対象に面接調査を実施し、各依存性様態の対人関係の特徴を検討した。得られた語りから、依存を否定する背景には葛藤や懸念が存在すること、多様な援助者の認識によって依存対象に対する比重が低下すること、互恵的依存関係の達成には自他の分化と相互尊重が必要なことが明らかとなった。また、これらの特徴は対象関係の発達段階に対応する可能性が示された。

キーワード：青年期、依存性、重要他者、二者関係

問 題

依存性研究の変遷

依存性とは“道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求”（高橋，1968）である。依存性の概念は、社会・経済的背景や価値観などの時代的変遷に伴いその意義や認識が変化している（竹澤・小玉，2006）。依存性に関する研究は、古くから母子関係やその養育態度に付随するものとして行われていた。とりわけ、対象関係論において依存性の発達の対象の内化過程として捉えられ（Parents & Saul，1988）、その発達変容が論じられてきた。その中で青年期以降の依存は退行的な心性として問題視され（江口，1966）、病理性に焦点が当てられた。依存性の問題として代表的なものに、DSM-IV（American Psychiatric Association，1994）による依存性人格障害が挙げられる。また、過剰な対人依存性は心因性の抑うつ、アルコール依存症、情緒的問題との関連が指摘されている（Hirschfeld, Klerman, Gough, Barctt & Korchin，1977）。一方、依存の発達変化や適応的側面を積極的に

認める研究もなされている。本邦においては高橋 (1968) が依存性と自律性は対極概念ではなく、自律性は依存性の発達・変容を通して獲得されるものと主張した。さらに関 (1982) は高橋の理論を発展させ、依存性のあり方を“依存欲求”、“依存拒否”、“統合された依存性”の3概念から捉え、その組合せを依存性様態とした。依存欲求とは“援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める欲求”である。依存拒否とは“顕在的には他者に対する依存を拒否する形で現れるが、潜在的に依存不安があると推測される態度”である。統合された依存性とは“成熟し、安定し、統合された人格に備わっているべき依存性”である。Bornstein (2005) はこれまでの依存研究を概観し、依存性が適応的に機能するためには“相互依存”、“依存状況においても自律性や自己決定を失わないこと”、“自分が依存することを受容すること”、“対象・場面・課題によって柔軟な依存ができること”の4点を挙げた。このように、現代において依存は自立の対極概念ではなく、自立という現象は依存の変形または成熟した状態であるとする捉え方が主流となっている。したがって、依存性は発達とともに消失するのではなく、成熟した人格にも見出されるものであり、他者との良好な対人関係を維持するためにはかえって必要である。

関係性の視点の導入

従来、依存は発達心理学や古典メタ心理学の領域において“依存する側”の問題として取り扱われていた (西川, 2003)。しかし、近年では対象関係論や発達心理学、社会科学の分野において“依存する者”と“依存される者”の双方への注目がなされている (西川, 2000)。これは依存性を個人内の欲求としてのみではなく、他者との関係における相互的な働きとして捉える視点である。この視点に基づくと、依存対象との関係は互いに様々な形で必要とし利用しあっている結びつきにみられる互恵的な相互作用として捉えられる (Johnson, 1993)。これらは依存性を依存と支援の双方向のやり取りによって成立する動的な対人間の働きとして捉えるものである。このような視点から、依存性を関係や状況から切り離れた個人内の問題として理解することには限界があり、依存する側のみならず依存される側も含めた関係性の問題として捉えることの重要性が述べられている (西川, 2003)。そのため、依存性を捉える際には個人内の欲求だけでなく、依存対象との相互作用や依存対象との関係性に焦点を当てた対人領域における検討が必要である。

依存性の発達と依存対象との二者関係

青年期は依存対象が母親を主とする養育者から友人や恋人へと変化する過渡期であり、依存対象は分化しそれぞれに異なる機能を与えられる (高橋, 1968)。そこで、誰を依存対象とみなし、その相手に自分にとっての意味を振り分けるのかは個人に左右される。そのため、当人が依存対象とする者に対する依存性を取り上げることが必要である。様々な依存対象の中で最も中核的な機能を担っているものは、それがどのような関係の者であれ、個人の存在そのものを支える心理的機能 (近接を求める機能、心の支えを求める機能) を相対的に強く充たす存在であると考えられる (高橋, 2010)。依存対象のような重要他者との関係性は個人の精神的適応に大きな影響を及ぼすこと (井梅ら, 2006) から、依存対象との関係や依存対象への意味づけは個人にとって重要な意味を持つと考

えられる。ここで、依存対象となる重要他者は個人にとって両価的な存在となり得ることに注目したい。重要他者は必ずしも情緒的なサポートする役割のみを意味せず、多くの場合は両価的でアンビバレントな意味を帯びた人物である(金子, 2006)。また、重要他者との関係は身近であるがゆえに必然的にポジティブ・ネガティブな関係を経験する(永田・岡本, 2008)。このような重要他者が有す両価性は依存という心性において特に顕著であると考えられる。すなわち、依存対象との関係から得る安定感や信頼感は個人が主体的に生きるために不可欠である一方、依存対象への過剰な依存は自律性の喪失や見捨てられ不安をもたらす。特に、青年期における二者関係では融合と分離を巡る葛藤が生じやすく、対象との関係の中で自己を保つことが課題となる(滝川, 2004)ため、依存性の問題は高まる。これらのことから、青年期の二者関係においては、依存性様態によって依存対象との関係のあり方が異なることが予想される。さらに、依存対象との関係のあり方は心理的適応に影響を及ぼすことから、依存性様態によって心理的適応の程度は異なると考えられる。

依存性とは象徴的な意味であれ、何らかの対象との関係においてのみ成立する心性である(関, 1982)。そのため、依存性を捉える際には依存対象との関係のあり方を検討することも必要である。しかし、依存性様態の相違と依存対象との関係のあり方についてはいまだ十分な検討がなされていない。そのため、依存性様態を対人領域の次元から捉えることが必要である。これらを踏まえ、本研究では本人にとって最も中核的な役割を担う重要他者を依存対象(以下、SO: Significant Other)とし、依存対象に向けられる依存性に焦点を当てるものとする。その上で一般他者(以下、GO: General Others)に向けられる依存性と依存対象に向けられる依存性の相違についても探索的に検討を行う。両者について差異が認められれば、そこに個人の対人関係の特徴や、依存対象の意味づけがより明らかになると予測される。

本研究の目的

本研究では、青年期における依存性様態が依存対象を主とする対人領域に及ぼす影響や、個人の心理的適応に及ぼす影響を検討することを目的とする。研究1では依存性様態と心理的適応及び関係評価の関連を検討する。なお、依存対象との関係は依存対象との関係に対する評価によって検討する。依存対象との関係における体験のなされ方がその関係への評価に反映されると考えられる。

さらに、研究2では面接調査において、依存対象との関係における個人の主観的体験を調査対象者の語りから抽出し、各依存性様態の対人関係の特徴を明らかにすることを目的とする。その際、対象関係の視点を援用して依存性様態と対象関係の発達段階との関連を検討する。依存性の発達の対象の内在化過程として捉えられることから(Parents & Saul, 1988)、特に対象恒常性の発達段階に注目することとする。

研究1

目的

依存性様態の相違が個人の心理的適応及び依存対象との関係に及ぼす影響を検討する。

方法

1. 調査対象者及び調査時期 A 大学生 313 名 (男性 132 名, 女性 162 名, 平均年齢 20.34 歳, $SD=1.25$) を対象に集団質問紙調査を行った。調査時期は 2013 年 10 月から 11 月であった。
2. 質問紙内容及び測定尺度 (a) 関 (1982) の依存性尺度 (「依存欲求」, 「依存拒否」, 「統合された依存性」の 3 因子, 39 項目から構成される。), (b) 伊藤・相良・池田・川浦 (2003) の主観的幸福感尺度 (「満足感」, 「達成感」, 「人生に対する失望感」, 「自信」の 4 因子, 12 項目から構成される。), (c) 依存対象を尋ねる質問。依存対象を特定するために, 「あなたにとって心の支えになったり, あなたの存在を心理的に支える方はどなたですか」と教示し, イニシャルの記入とその者との関係を尋ねた (選択肢は母親, 父親, 同性の友人, 異性の友人, 恋人, その他であった。), (d) SO に対する依存性。依存対象に対する依存性を測定するために, 関 (1982) の依存性尺度について, (c) で選択した者を当てはめて回答がなされるよう教示を加えた。(e) 金政・大坊 (2003) の関係評価 (関係に対する「満足度」, 「要求充足度」, 「関係継続意思」, 「重要視」, 4 項目, 7 件法)。(f) フェイス項目 (性別, 年齢)。

結果と考察

1. 選択された依存対象の内訳

依存対象として選択された者の内訳を Figure 1 に示す。母親 96 名, 父親 12 名, 同性の友人 103 名, 異性の友人 17 名, 恋人 66 名, その他 12 名であった。なお, その他として「先生」, 「塾の講師」, 「兄妹」等が挙げられた。

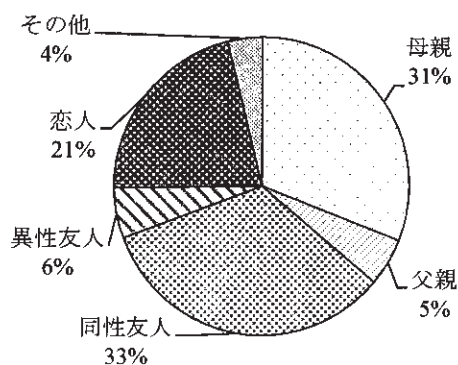


Figure 1. 選択された依存対象の内訳

2. 依存性尺度の因子分析

依存性尺度 (関, 1982) について, 各項目の得点に基づき最尤法, *promax* 回転による探索的因子分析を行った。因子数の決定においては, 固有値の大きさの変化や各因子に含まれる項目数, および各因子に含まれる項目の内容などを考慮した。これより, 3 因子を採用し, 再度分析を行った。その際, 因子負荷量が .40 以上であるという基準に基づいて項目を選択した。この結果, 39 項目のうち, 27 項目を削除し, 解釈可能な 3 因子 12 項目が抽出された (Table 1)。第 I 因子は「安心して

人の世話になれない方だ」といった5項目で構成され、依存することへ対する不安や依存を拒否する態度を示す項目群であるため、「依存拒否」因子とした。第II因子は「重要な決心をする時は、いつも、人の意見がききたい」といった4項目から構成され、意思決定の難しさや課題達成に対する支援欲求を示す項目群であるため、「依存欲求」とした。第III因子は「心の支えになってくれる人がいる」といった3項目から構成され、特定の依存対象から得られる安心感を示す項目群であるため、「統合依存」因子とした。因子構造妥当性を検討するため、適合度指標を算出したところ、GFI=.952, AGFI=.927, RMSEA=.052, AIC=147.389という値を得た。適合度指標が良好なことより、本尺度の因子構造妥当性が確認されたと考えられる。なお、Cronbachの α 係数は.78~.81の範囲であった。

Table 1
依存性尺度の因子分析結果（最尤法, *promax*回転）

	1	2	3	
第I因子「依存拒否」 $\alpha=.81$				
21. 安心して人の世話になれない方だ。	0.74	0.21	-0.12	
32. 自分のために、誰かに何かをやってもらうのは苦手だ。	0.68	-0.08	0.08	
26. 自分のことを誰かに相談するのは、何か不安である。	0.67	0.04	-0.02	
4. 誰かに頼る立場になると、どうも落ち着かない。	0.65	0.04	0.02	
33. どんなに困ったときでも、人に頼らない方だ。	0.64	-0.25	0.04	
第II因子「依存欲求」 $\alpha=.78$				
34. 重要な決心をする時は、いつも、人の意見がききたい。	-0.02	0.72	-0.10	
11. 一人で決心がつかかねる時には、誰かの意見に従いたい。	0.03	0.69	0.02	
13. 何かまよっている時には、誰かに「これで良いですか」と聞きたい。	0.05	0.67	0.05	
9. 難しい仕事をする時には、できたら誰かと一緒にいたい。	-0.04	0.63	0.10	
第III因子「統合依存」 $\alpha=.80$				
19. 心の支えになってくれる人がいる。	0.05	0.02	0.88	
18. 自分の信頼できる人がいるから安心だ。	-0.03	0.04	0.84	
10. 私がどんなことをしようと理解してくれる、と思う人がいる。	-0.01	-0.01	0.64	
	寄与率 (%)	25.70	39.66	51.76
	相関係数 II	-0.15		
	III	0.18	-0.31	

3. GO依存性とSO依存性の得点の比較

GO依存性とSO依存性に得点差が認められるかを検討するため、依存性尺度の下位尺度において対応のないt検定を行った (Table 2)。その結果、全ての下位尺度において有意差が認められた。依存欲求、依存拒否ではSO依存性よりGO依存性の方が、統合依存ではGO依存性よりSO依存性の方が有意に得点が高かった。依存対象とは重要他者であり、一般的に情緒的・心理的コミットメントが強い存在とされる (石井・竹澤, 2011)。そのため、一般他者と比較して依存対象に対して依存拒否が低いことは了解可能である。同様に、統合依存が一般他者より依存対象の方が高いことも妥当な結果であると言えよう。一方、依存欲求は未熟な依存性であり、関係が近い者に一層強く向

けられるとされる概念である。そのため、今回の結果は依存欲求の定義に矛盾するものであった。この点に関し、被援助志向性の観点から以下のことが推察される。脇本 (2008) は、“他者に援助を求めることは自己の立場の弱さ、自己の対処能力の低さなどを自己自身及び他者に伝える側面、つまり自我脅威となる側面を持つ”と述べている。つまり、過剰な依存状態が示すような利益過多の場合では、被援助者はむしろ無能力さが露呈され、自尊心が低下すると考えられる。青年期は自立の達成のために依存拒否が高まる傾向がある (関, 1982) ことから、依存対象に対してむしろ依存欲求を向けないことで、自尊心を保持しているのではないかと考えられる。しかし、この点に関する考察は十分ではないので、今後検討する必要がある。

Table 2
GO依存性とSO依存性の平均の比較

	GO依存性		SO依存性		t値	効果量 d	高低
	平均	SD	平均	SD			
依存欲求	15.12	3.05	12.03	3.46	15.23 ***	0.95	GO>SO
依存拒否	14.62	3.95	10.41	3.74	17.68 ***	1.10	GO>SO
統合依存	11.37	2.71	12.15	2.18	-5.54 ***	-0.32	GO<SO

*** $p<.001$

4. 依存性得点によるクラスタ分析

依存性の様態を検討するため、SO 依存欲求、SO 依存拒否、SO 統合依存についてクラスタ分析 (Ward 法) を行い、各クラスタの人数比や解釈可能性を考慮した上で、3 クラスタを抽出した。さらに各クラスタの特徴を検討するために SO 依存欲求、SO 依存拒否、SO 統合依存を従属変数とする分散分析を行った結果、全ての項目で有意差が認められたため Tukey 法による多重比較を行った。その結果を Table 3 に示す。また、各クラスタの特徴を視覚的に把握するためにグラフ化したもの (因子得点) を Figure 2 に示す。クラスタ I は、依存拒否の高さと依存欲求及び統合依存的低さに特徴付けられた。これより、この群は他者に頼ることや他者から好意を向けられることに抵抗を感じやすく、日常生活では他者に頼るよりも自己解決を試みる傾向が強い群であることが推察された。したがって、クラスタ I を「依存否定群」と命名した。クラスタ II は、統合依存及び依存欲求の高さと依存拒否の低さに特徴付けられた。この群は、自身の存在を支えるような他者の存在を認識しており、依存に対する安心感を抱きつつ、その他者の存在によって活力を得ている群と考えられる。さらに、意志決定に際しては他者の意見を積極的に取り入れて決定を下す傾向があると推察される。そのため、クラスタ II を「互恵的依存群」と命名した。クラスタ III は、依存欲求及び依存拒否が低く、統合依存がやや高い群である。依存欲求及び依存拒否が低いことから、他者に援助を求めることへの抵抗は少ないものの、自身で主体的に意思決定を行うことができる群であると推察される。この群を「対象分散群」と命名した。

Table 3

各クラスタにおける依存性得点下位尺度の分散分析結果

	クラスタ I (N=153)	クラスタ II (N=71)	クラスタ III (N=89)	F 値	多重比較 (Tukey法)
SO依存欲求	11.85 (3.45)	15.12 (2.17)	9.87 (2.38)	64.38 ***	I < III < II
SO依存拒否	13.45 (2.60)	6.29 (1.21)	8.47 (1.79)	324.66 ***	II < III < I
SO統合依存	11.01 (2.16)	14.01 (0.98)	12.63 (1.65)	71.08 ***	I < III < II

注：() は標準偏差を表わす

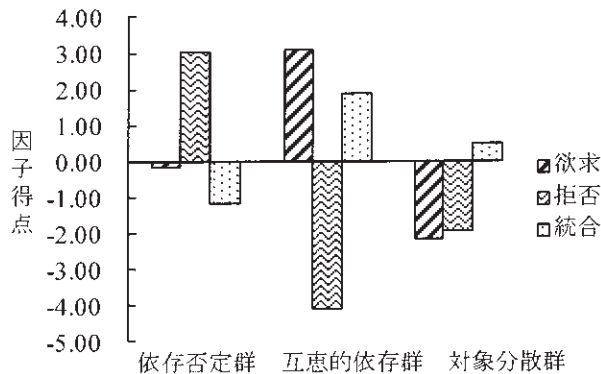
*** $p < .001$ 

Figure 2. 各群の特徴

5. 群による主観的幸福感の検討

群によって主観的幸福感の得点に差が認められるのかを検討するために、群を独立変数、主観的幸福感合計を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果、群の効果が認められた ($F(2,310) = 7.43, p < .01$) ため、Tukey法による多重比較を行ったところ、依存否定群は互惠的依存群及び対象分散群より有意に得点が低かった (Table 4)。森田 (2003) によると、親密な対人関係の実感の主観的幸福感の要因であることから、依存に対する葛藤を抱える依存否定群では主観的幸福感が低いと考えられる。これより、個人の適応には依存拒否に特徴づけられるような自己依頼や自立志向性だけでなく、自らを支える他者との関係や、関係に伴う安心感が必要であると推察された。3群の中で最も主観的幸福感の得点が高いのは互惠的依存群である。関 (1982) は、依存性が成熟した段階にある者は自身の依存が他者に受け入れられるという安定感が内在化されており、それによって自己確実感を持って主体的に生きていくことを可能にする다고述べている。自己確実感自身の価値や能力に対する信頼に繋がると考えられる。そのため、現在や未来の生活についての自己効力感をもち、人生に対する前向きな姿勢や達成感を高めると推察される。

6. 群による関係評価の検討

群によって依存対象との関係評価に差が認められるのかを検討するために、群を独立変数、関係評価合計得点を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果、群の効果が認められた ($F(2,310)=13.27, p<.001$) ため、Tukey 法による多重比較を行った。その結果、依存否定群、対象分散群、互恵的依存群の順で有意に得点が高かった (Table 4)。これより、依存否定群は依存対象との関係において何らかの葛藤や不満を感じており、満足感が低いことが推察された。清水・大坊 (2005) は関係評価に関連する関係性認知として「不確実性」因子を挙げ、“不安定さや懸念といった安心感の乏しさは、個人にとって危機的状況となり得る”と述べている。また、不安傾向の高い個人は、不確実さを高く認知する傾向が強い可能性が示唆されている (金政・大坊, 2003) ことから、依存否定群では依存対象との関係をネガティブに捉えがちであり、頼りたいのに頼れないという葛藤状態は関係に対する不安定さを助長していると考えられる。一方、互恵的依存群は3群において最も関係評価が高く、依存対象との関係を自身にとって肯定的なものと捉え、その関係に対する満足度も高いことが明らかとなった。成熟した依存では、自律性を保持しつつ、他者と温かい相互交流を享受することが可能となる (久米, 2001) ことから、依存対象と互恵的関係を築いていることが予想された。そのため、他の2群と比較し、依存対象との関係評価が最良であることは妥当な結果であると言えよう。この結果は親密な関係において情緒的サポートを享受している者ほど、関係に対する効力感が高いとする橋本 (2005) の知見とも合致すると考えられる。また、依存欲求の高さは依存対象に対し、援助期待が高く、同時に援助を得られる可能性 (サポート入手可能性) の高さを表すと考えられる。すなわち、互恵的依存群では依存対象を適切な援助を与えてくれる存在として知覚し、またその援助の有用性に対する確信も高いことが推察された。そして、サポート享受における満足感は関係に対する肯定的評価に繋がると考えられる。このような支持的な対人関係が個人の安寧に寄与することは多くの研究で述べられていることであり、互恵的依存群の主観的幸福感の高さを説明する一因であると考えられる。

Table 4
群による主観的幸福感及び関係評価の分散分析結果

	依存否定群 (N=153)	互恵的依存群 (N=71)	対象分散群 (N=89)	F値	多重比較 (Tukey法)
主観的幸福感	33.19 (4.77)	35.61 (5.09)	34.91 (4.57)	7.44 **	依存否定群< 互恵的依存群=対象分散群
関係評価	22.01 (3.89)	24.63 (4.00)	23.34 (2.72)	13.28 ***	依存否定群<対象分散群 <互恵的依存群

注： () は標準偏差を表わす

** $p<.01$, *** $p<.001$

研究 2

目的

研究 1 では、依存性様態によって個人の心理的適応や依存対象との関係評価に差が認められることが明らかとなった。しかし、これらの差異をもたらす要因についての検討は行えていない。そこ

で、依存対象との関係における主観的体験や関係のあり方を群ごとに比較し、各群における対人関係の特徴を明らかにするとともに、その要因を検討する必要があると考えられる。そのため、依存性様態ごとに依存対象との関わりについて抽出し、各様態の特徴を比較検討する。さらに、依存性様態を対象関係の発達段階の視点から検討する。

方法

1. 調査対象者及び調査時期 調査への協力に応じた学生のうち、研究1で得られた3群からそれぞれ4~5名ずつ計13名に対し調査協力を依頼した。その際、性別、依存対象との関係を考慮し、極端な偏りが生じないように配慮した。調査時期は2013年10月から11月であった。調査対象のプロフィールをTable 5に示す。

Table 5
調査対象者のプロフィール

ID	群	性別	年齢	対象
A	依存否定群	女性	19	同性友人
B	依存否定群	女性	20	同性友人
C	依存否定群	男性	19	同性友人
D	依存否定群	女性	19	恋人
E	依存否定群	女性	20	恋人
F	対象分散群	女性	20	母親
G	対象分散群	女性	20	母親
H	対象分散群	男性	19	同性友人
I	対象分散群	男性	20	同性友人
J	互恵的依存群	女性	22	母親
K	互恵的依存群	男性	21	恋人
L	互恵的依存群	男性	20	恋人
M	互恵的依存群	女性	21	同性友人

2. 手続き 1回60分から120分の半構造化面接を実施した。調査開始前に面接承諾書に署名を求め、録音や結果の公表についての同意を得た上で、内容を全て録音し逐語記録を作成した。調査場所はA大学付属の心理臨床センターの面接室もしくは心理学講座の教室の教室であり、いずれも第三者の出入りがない場所で行った。なお、本調査を実施するにあたり、広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得た。

3. 調査内容 対象者にとっての依存対象への意味づけ、依存対象との関わり方、その中における体験を聴取するための質問を行い、半構造化の質問に沿うよう適宜質問を加えた。主な質問内容は(a) 依存対象への意味づけ、(b) 依存対象との関係からもたらされる活力、(c) 依存対象との関係で生じるネガティブな体験、(d) 依存対象に求める助力、(e) 依存対象にとっての自身の意味づけ、(f) 依存対象との関わりの中での印象的な出来事、(g) 他者との関わり方との比較であった。なお、それぞれの質問についての評価も併せて尋ねた。

4. 分析方法 面接調査データの整理は、前盛・岡本 (2008) 及び山田・岡本 (2008) の手法にならった。具体的には、逐語記録から各対象者の依存対象に関する発言をクラスタごとに①個人にとっての依存対象の意味づけ、②依存対象との関係における体験とその時の感情の2点を文章単位で抽出した。これらをそれぞれ内容別に要約した後、類似したものをグルーピングしてカテゴリ化を行った。得られたカテゴリを下位カテゴリとし、さらに、意味が近いと考えられる下位カテゴリに対してグルーピングを行い、上位カテゴリとした。

結果と考察

分析の結果、最終的に依存否定群6個、対象分散群6個、互惠的依存群6個のカテゴリ上位カテゴリ及び全28個の下位カテゴリに集約された。以下、上位カテゴリを【 】, 下位カテゴリを[]とし、対象者の語りを斜体で表記する。得られたカテゴリの一覧、定義を Table6, 7に示す。さらに、Bellak (1973) による面接法による対象関係の評価法 (Table 8) を参考に、対象恒常性の発達段階と得られたカテゴリの対応表を作成した (Table9)。Bellak (1973) の面接法における対象関係の評価法原版は筆者が邦訳を行った。

後日、最終的に抽出されたカテゴリの妥当性を検討するため、筆者が作成した評定マニュアルにより、それぞれのカテゴリの特徴を提示し、全ての発言について、臨床心理学を専攻する大学院生2名が独立して再分類した。評定者間の一致率は平均84%であり、十分な妥当性が示された。なお、評定が一致しない項目は、評定者間で協議の上分類を行った。

Table 6
各群において生成されたカテゴリ

依存否定群 (N=5)	対象分散群 (N=4)	互惠的依存群 (N=4)
【気持ちの受容と保証】	【気持ちの受容と保証】	【気持ちの受容と保証】
[気持ちの受容]	[気持ちの受容] [保証]	[気持ちの受容] [保証]
【関係への特別視】	[不満の吐露]	【関係への特別視】
[居心地の良さ]	【関係への特別視】	[唯一無二の確信]
[否定的一面の表現]	[居心地の良さ]	【対人関係の基盤】
【被影響性】	【自他の分化】	[対人関係の基盤]
[密着] [個の主張]	[個の保持] [自己内緩和]	【誠実性】
【自己の保証】	【多様な依存対象の認識】	[誠実性]
[助力への喜び]	[依存対象以外の支え]	【相互成長】
[理解されている感覚]	[限定された領域]	[相互成長]
【非対等な関係】	【関係への満足】	【自律性の達成】
[羨望][過剰依存][気兼ね]	[理解されている感覚]	[相互自立] [相互尊重]
【不確実感】	[自己の相対視]	
[萎縮] [依存への葛藤]	※対象が母親に限定	
	【依存への否定的態度】	
	[諦め] [懸念]	

注:【 】, []は上位カテゴリ, []は下位カテゴリを示す。

Table 7
各上位カテゴリの定義

	カテゴリ名	定義	該当者
全群共通	気持ちの受容と保証	自身の気持ちを受容して欲しいという欲求。自身の気持ちを依存対象が理解してくれるという予想を含み、依存対象に受容されることで、自らの感情についての保証を得る。	A,B,C,D,E,F,G, H,I,K,L,M
	関係への特別視	依存対象との関係を特別視する態度。性格や価値観、感じ方等の共通性、類似性を含む。気遣いや遠慮を感じない、心地よい関係。	A,B,C,F,G, H,I,K,L,M
依存否定群	被影響性	依存対象との関係によって自己のあり方が方向づけられること。依存対象への近接を示す融合性と、影響を排除しようとする分離性を含む。	A,B,C
	自己の保証	依存対象の助力になることや頼られることに対し喜びを感じ、依存対象との関わりの中で自己存在の保証を感じる。	A,E,D
	非対等な関係	依存対象との関わりを一方的なものであったり、比重が傾いているとする捉え方。気遣いや劣等感が含まれる。	A,C,D,E
	不確実感	依存対象との関係に対する不安や懸念の強さに特徴付けられ、関係が齟齬されることに対する過敏さを持つ。	A,D,E
対象分散群	自他の分化	依存対象との分化がなされ、自己視点と他者視点双方を併せ持つこと。	J,K,L,M
	多様な依存対象の認識	選択された依存対象以外の援助者の存在。依存対象に対する傾注にいたりにくく、援助者が分散されている。	J,L,M
	関係への満足	依存対象との関係において、良好な自己観を持つこと。依存対象に理解・受容されている感覚と共に、依存対象にとっての自己を肯定的に捉えること。	J,L,M
	依存への否定的態度	依存対象に対し潜在的には依存欲求を向けながらも、自らの依存が受容されない、あるいは心地良い体験とならないという予想のために依存することを否定する態度。	K, L
互恵的依存群	対人関係の基盤	依存対象の存在や依存対象との関わりが、他者との関わり方や生活を支える基盤となっている。	F,G,H
	誠実性	依存対象に対し、ありのままの姿で接すること。依存対象への信頼が前提となる。また、ありのまま姿で依存対象に接することが、依存対象に対して信頼を表わす意味を含む。	F,G,I
	相互成長	依存対象との関わりの中で、双方が高め合い、成長している感覚。	F,G,H,I
	自律性の達成	依存対象との関係が密着したものではなく、自他が分化し互いに自立している。その上で相互尊重がなされ、良好な関係を築いている。	F,G,H

Table 8

Bellak et al (1973)による面接における対象関係の評価法

	他者との関連性の程度と質	対象関係の発達程度	自己・他者の分化程度	対象恒常性
発達 の 段 階	(自己愛、共生、分離固体化、内閉傾向、自己中心性、自己愛的対象選択、相互性の程度、共感性、コミュニケーションの容易さ)。親近、疎遠の程度および対象関係維持における柔軟性と選択性の程度。	(幼児性一成熟性)。現在の関係が以前の関係によって良い景況や悪い影響を受けたり、そのパターンによって拘束されたりする程度を含む。	他者を自分自身の延長としてでなく、独立した存在として知覚し、対応する程度。	対象安定の維持、すなわち対象の物理的不在およびその対象に関連した欲求不満や不安に耐えることのできる程度。内化の程度と種類。
1	対象関係の決定的な欠損。拒絶や沈黙としての退却、もしくは隠遁者や世捨て人のような生き方。関係は前共生段階であり、主に自閉的。基本的な関係は“混乱や苦しみをはらんだものであり、その他の全体分裂的要素や急激な悪化”を伴う。他者との距離の調整機能は乏しい。主体は他者からの刺激に揺さぶられ易い。	欠乏と決定的な関係の欠乏のために最早期の要素だけが“関係性”を特徴付ける。	他者を知覚する最低限の能力。極端な寄生もしくは自己愛。	分離不安さえ十分に発達していない。「人」は目の前に居る時以外は存在しない。
2	完全な自閉ではないが、ほぼ引きもこりの統合失調症的な孤立。非常に自己愛的、寄生的、もしくは共生関係;代理対象、非常にサドマゾ的な繋がり。幼児性の過剰な愛着あるいは愛着の不足のいずれか。	現在の関係は早期の固着に基づく転移であり、早期の母子関係における困難を反映するかも知れない。何度も繰り返される困難は、例外と言うよりもむしろ規則的なものである。	人の感覚や意思、信念は、他者の視点からはほとんど理解されず、大抵は主体に対して直接もたらされる影響によって理解される。はじめは自我中心的な進捗に伴って他者に対して反応するため、主体は自分の欲求を無視することが非常に困難である。	分離不安が顕著であり、対処喪失、愛の喪失、自己愛的傷つきに対して不適応的な反応となり得る。喪失に対する反応ははまだ破滅的恐怖に彩られている。
3	関係は分離もしくは過剰な依存、密着に特徴付けられる。近接の心地良いバランスを保つためには相当な困難が伴う。熱烈もしくは冷淡な関係のどちらかをより好む。関係の深まりに対する恐怖が存在する。	現在の関係は非常に子供じみており、幼少期の特徴やそれに類似したものを未だに残している。感情的に“与えられること”を期待しており、物事が良い方向に向かうのを待っている。	ごくまれに他者を他者として知覚し、応答する。多くの自己言及は他者への反応の中に見出される。自身の同一性は過度な他者の認識に基づく;他者を変化させようとする過度の試みは、それが自己同一性を具体化させるという信念によってなされる。自身の望みを満たすために他者を「変える」という不適切な試みが行われる。他者がどのように感じるかを気にとめず、自分の願望を満たすために人を使い、利用するだろう。	重要他者への依存あるいは自立のための過剰な努力や自己充足を示すための過剰な試み。主体は容易に傷つけられた、拒否されたと感じる。重要他者の表象はいまだうまく内在化されておらず、喪失と分離に対する過剰な反応。実質的には1人で生活することができない。あるいは、日常生活において明らかな孤独を好む。
4	重要な他者との関係は神経症的な相互作用に特徴付けられる。退却、自己愛的、共生的な関係になり得るが、これらの出現は原始的なものより複雑である。また、周囲の人々に対する関わりは表面的でゲームのようなものである。	両親との関係を含む、最早期に特徴付けられる葛藤の要素。この意味では、ただ母親においてのみ束縛を示す関係性より発達している。	情動的充足やストレスがないような中立的な状況下では、他者は独自の存在として反応され得る。より厳しい状況では、安定した自己感が促進されるよう、他者を変化させようとする試みがなされる。	他者の注意が明確に向けられていない時、潜在的に拒否や見捨てられることに対する繊細を持つ。孤独や1人で生きることに上手く耐えることができない。

Table 8

Bellaak et al (1973) による 面接における対象関係の評価法 (続き)

5	ごくわずかな人々との混乱した相互作用。それは慢性的というより、むしろ散発的に行われる。重要他者との対象選択や行動はなんらかの高い柔軟性を持つが、ストレス状況においては、強制的で自由のない対象選択や行動を引き起こす。	早期のパターンの転移や再発は、日々においては例外というよりむしろ規則的である。重要な関係性においては、再発する難しさがあるかもしれない。	より深刻な状況下を除いて、他者は自己と分化し、自身とは異なる存在として知覚される。主体は他者の感情を認識し、それらを理解し、適切に反応する。しかし、脅威的な状況では他者の主張に対して、理性的でない予期を持つだろう。	対象の内在化は明らかであるが、深刻で慢性化したストレス状況下では不在や喪失に対し過剰反応する。一人で生きることに対し困難を抱えているが、孤独を埋め合わせる方法を持つ。
6	多くの関係において選択の柔軟性と様相は意識的であり、自動的に最適な距離を保つ。	自己と、重要な他者の相互的な満足のために、成熟した対象関係へ至る。	主体は常に他者を分離した個人として対することができる。適切なほど良い共感を保ち、他者の感情や視点を失うことはまれである。	重要な人々が内在化されているように、対象恒常性はよく発達している。喪失、分離、その他の潜在的な心的外傷は過剰なストレスもなく切り抜ける。他者が物理的に存在しよすが、まいが、その者について考え、反応し、敬意を持ち続ける。
7	関係は相互性、相互利益、深さ、広範性に特徴付けられる。それらは円滑性を維持し、脅威に対しても安定を損なわない。それは強制とは対照的なものであり、選択可能なものである。他者との距離の調整は最適である。主体は最大限の刺激や他者によって生じる興奮に対しても適応的に機能する。	早期関係における固着や歪みはもはや定かでない。関係の満足は、現在の成人のニーズに応じるものである。柔軟性と選択可能性が対象関係の特徴付ける。	人々を他者として存在し、独自の存在としてその要求を理解できる。人々を、自我中心的な準拠枠ではなく、あるがままの状態によって理解する。まず他の人に反応しようとするために、一時的に自分の欲求を無視する。	対象恒常性は優れており、そのことは分離からの適応のしやすさ、すなわち後の重要な対象の喪失からの適応的な回復から判断できる。重要他者との関係は、たとえ物理的に存在しない時でも、高度に成長している。

1. 全群に共通するカテゴリ

各群に共通して得られたのは、【気持ちの受容と解消】と【関係への特別視】である。〔気持ちの受容〕は依存対象に対し気持ちを発散し、被受容感を体験することである。さらに、〔保証〕は依存対象によって気持ちを受容されることで、自身に対する保証を感じることを指す。依存対象に対し保証を求めることは、高橋 (1968) による依存様式の第 4 段階に相当する。依存性は青年期において一応の成熟した段階に達するとされる (久米, 2001) ことから、青年期における依存対象が担う機能は保証や心の支えといった象徴的要求であることが推察された。

【関係への特別視】は依存対象との関係に対する意味づけを表す。依存対象は個人にとっての重要他者であるため、依存対象との関係はコミットメントが強く、親密度が高い関係であると考えられる。〔居心地の良さ〕は性格や価値観、感性等の共通性、類似性が高く、気遣いや遠慮を感じない関係を指す。依存対象の中核的機能が〔受容〕や〔保証〕であることから、関係においてありのままの感覚を抱くことは〔居心地の良さ〕に繋がると考えられる。なお、全群に共通したカテゴリであっても、下位カテゴリは群によって相違が見出された。この点については、群ごとにその特徴を述べる。

2. 各群の特徴と対象関係の発達段階

2-1. 依存否定群

依存否定群は、依存対象から援助や好意を受けることに対する抵抗が高いことが特徴である。〔否定的一面の表現〕は、自身の一側面を依存対象にのみ表現することであり、その一側面を否定的に捉えていることが特徴である。これは他者に対して否定的一面を晒すことができないために、依存対象へ比重が集中することを表わす。しかし、依存対象への集中が過剰になると、心理的距離の過度な近付きである一体性の過剰希求（井梅ら、2006）が強まり、依存対象との二者関係に埋没する危険性を孕んでいると考えられる。【非対等な関係】は依存対象に対し一方的に頼ったり、劣等感を抱いたりして、依存対象との関係を一方的あるいは上下関係のように感じることに特徴付けられる。このような関係では、依存対象を肯定的に捉える一方で自己評価の低さが見受けられた。特に、援助の観点からすれば援助と支援の不均衡は心理的負債感を生じさせ（田中、2005）、関係に対する満足感を低下させると考えられる。【被影響性】は自己のあり方が依存対象との関わりによって大きく影響を受けることを示し、依存対象に対する過剰な接近あるいは分離を求める反応として顕在化する。〔個の主張〕は自己保持欲求に特徴付けられ、他者に左右されることなく自らのペースを保ちたいという気持ちを表す。該当者は対人関係に伴う煩わしさや負担感を感じており、他者一般に対する関係の深まりの回避や拒否が認められた。これは山田・岡本（2008）で見られた「他者と関係を築く力」の未熟さを示すと考えられる。

「何か、もう一歩踏み込めないっていうのはあると思います。何か、そこまでの踏み込み方が良く分からないっていうのもあります（対象者B）」。

このように、他者に対する親和不全が強いBにとって依存対象は自己保持を脅かされることなく関係を維持できる存在であり、他者に対する親和不全を補っていると考えられる。二者関係における葛藤を検討した中西（2010）は、自己保持欲求は融合性が過度になった場合、束縛が生じ、その結果として自己保持欲求が高まると述べている。しかし、本研究で得られた結果では融合性そのものを回避しており、融合の危険がない対象を依存対象として選択していることが明らかとなった。一方、〔密着〕は依存対象に対する心理的な近づきや融合感を示す。中西（2010）によると、親密な二者関係において融合感は生じやすく、相手との分離不安が高まると相手にしがみついてしまうと述べている。

「2人、2人は基本一緒で。あと、何か他の友達も何人かいたりするんですけど。基本2人と、誰か。（中略）aがいるから、結構わいわい話せたりするっていう場面もあるんで。うん、だからaのおかげで自分も明るくいられるっていうのも、あるって思います（対象者A）」。

このように対象者Aは依存対象との心理的・物理的距離が近く、依存対象との二者関係に比重が傾いていることが窺えた。依存対象の存在によって自己が支えられているが、傾注が著しいために、依存対象の不在や喪失に耐える力は十分に備わっていないと考えられる。〔個の主張〕と〔密着〕は依存対象との関わり方こそ正反対であるが、関係のあり方によって自己が揺るがされるという点において共通している。松尾（2006）は二者関係における融合不安と分離不安を取り上げ、両者の交錯を「関係性ジレンマ」とした。この種のジレンマは生涯を通して体験されるものであり、このよ

うな葛藤を経ることによって対人的な「関係性」の恒常性を獲得していくと述べている。これを踏まえると、【被影響性】は関係性の恒常性を獲得する最中に生じる葛藤として理解することが可能であると考えられる。

【不確実感】は〔萎縮〕と〔依存への葛藤〕に特徴付けられる。〔萎縮〕では関係に対する安心感の乏しさを評価への囚われが推察された。関係における自己感が曖昧であり、気遣いや懸念の色彩が強い。その背景には対象からの拒否や見捨てられることに対する過敏さを持つと考えられた。また、依存対象との繋がりに対する感覚が希薄であり、対象恒常性の危うさが推察された。

「何か連絡がないと全て断たれてしまうというか。会えないし、何してるのか分からないくらいの状況になってしまうので(対象者E)」。

〔依存への葛藤〕は依存対象に援助を求める気持ちとその気持ちを否定する葛藤を表す。特に、依存に対する不安は自律性を失う不安として語られており、そのような状況に陥らないために依存を否定しているのだと考えられる。

「何かある度に、彼に頼るのが当たり前になってしまうと、何か、本当に1人では何もできなくなるんじゃないかとか(対象者E)」。

依存に対する葛藤は喪失や分離に対する過剰な反応として捉えられることから、対象関係の発達は十分ではないと推察される。これらより、依存否定群では対象関係の問題が窺えた。

2-2. 対象分散群

対象分散群は依存対象の相対的な比重の小ささが特徴である。【多様な依存対象の認識】は依存対象を自らにとって重要な存在として認めながら、依存対象のみに傾注することなく、周囲の他者の存在を積極的に認めているものである。領域ごとに頼る者が異なるという役割分担がなされており、相対的に依存対象が占める割合が小さい状態だと考えられる。Bornstein & Languirand (2003) は適応的な依存の条件として、「対象・場面・課題によって柔軟な依存ができること」を挙げている。この観点からすると、各領域においてそれぞれ援助を求める相手が存在することは、肯定的な依存のあり方の一つであると考えられる。〔限定された領域〕は依存対象との関わりが学校生活やサークル活動など、特定の領域に限定されていることを示す。すなわち、依存対象は個人が最もコミットする領域から選出されており、個人の価値観を反映した存在であると考えられる。【自他の分化】は〔個の保持〕と〔自己内緩和〕からなる。依存否定群で見られた〔個の主張〕が自己保持のために依存対象との関わりを否定するのに対し、〔個の保持〕では依存対象との関わり合いの中で「程よい」付き合い方を模索、維持している。また、〔自己内緩和〕は、依存対象と対立が生じた際にも他者視点を保持しながら、自力で折り合いをつけることを指す。このように、【自他の分化】は葛藤や対立場面においても、自己視点と他者視点の双方を維持しながら相互調整を行う力であると考えられる。【関係への満足】は〔理解されている感覚〕〔自己の相対視〕からなる。〔理解されている感覚〕は依存対象に対する信頼に基づき、自己受容や自己確実感をもたらすと考えられる。さらに、〔自己の相対視〕は依存対象との関係における相対的な自己観であり、客観的視点が備わっていることを示す。〔自己の相対視〕における肯定的な自己観は自身に対する確実感を培い、自他に対する信頼感を

高めると考えられる。

この群では母親を依存対象とした者（対象者F、G）にのみ該当するカテゴリとして【依存への否定的態度】が得られた。母親に対する両面的な思いが存在し、母子関係における安心感の乏しさが推察された。〔懸念〕は依存後の母親の反応が過剰であるために頼ることを差し控える態度である。

〔諦め〕は母親に援助を求めても、母親から援助を得ることはないという確信であり、助力欲求が適切に満たされていないと考えられる。

「あんまり、私のこと心配して病むじゃないですけど、何かすごい、精神に異常をきたすじゃないけど、なんだろう（対象者F）」。

「自分でどうにかできることは、そういう一切、干渉を全くしてこない。多分しないようにしてるんだと思います。例えば私が一人暮らしの不安があって、嫌だなんて思っても多分、知らんわって言われると思います（対象者G）」。

両名とも母親は重要な存在である半面、母親への依存は自己を脅かし得るために依存を否定していると考えられる。ともに娘役割を重視しており、親からの自立が達成されていない状態だと考えられる。Winnicottは成熟の指標として「一人でいられる能力」を挙げ、その基盤に「未熟な自我が、母親に自我を支えてもらうことによって自然と均衡を得る体験」の必要性を述べている（牛島、1977）。対象者F、Gにおいては、これまでの母子関係において絶対的な安心を得る体験が十分ではなかったためにそれがうまく内在化されておらず、適度な依存を困難にさせている可能性が示唆された。

対象分散群では誰を依存対象とするかによって対象関係の発達段階が異なると推察された。友人を依存対象にした者では対象の喪失や分離に関する葛藤は認められない。【自他の分化】がなされていることから、依存対象を独自の存在として認識し、その上で関係を持つ力が発達していることが窺えた。しかし、依存対象は個人を支えるような根源的な存在ではなく、互恵的関係の認識には至っていない。一方、母親を対象とした者では依存に対する葛藤が顕著であり、そのために適切に依存することが困難となっている。したがって、対象関係の段階は潜在的な拒否や見捨てられに対する繊細さを有する段階であると考えられる。これらより、依存対象との関係によって依存性表出の機序やその現れ方が異なることが推察された。したがって、依存性発達を捉える際には単に依存性の数量的な大小や依存性様態のみではなく、依存対象として誰を選択するのかという点も加味する必要があると考えられる。

2-3. 互恵的依存群

互恵的依存群は安心感を伴った依存がなされており、依存対象の存在や関係から活力を得ることが特徴である。【対人関係の基盤】は依存対象との関係や、依存対象との関わりからもたらされる活力が日常生活での基盤となっている。関（1982）は「安定感の内在化は、個人が主体的に生きることを可能とする」と述べており、依存対象との良好な関係が個人の生活を支えていると考えられる。【自律性の達成】は依存対象との関係が密着したものでなく、互いに自立した上で良好な関係を築いていることを指す。依存対象の独自性を認め、自他の差異を認識がなされている。健康的な

依存とは自律性や親密性を保持し、自己感を保ちながら他者に頼ることとである (Bornstein& Languirand, 2003)。したがって、これらが達成されている【自律性の達成】は適応的な依存のあり方であると考えられる。これに関連し、互恵的依存群では依存対象との否定的な体験のなされ方にも特徴が見られた。互恵的依存群においても依存対象との関わりで生じる不満や葛藤について語りが得られた。しかし、この群ではそれらの出来事は関係に否定的影響を及ぼしておらず、むしろ関係への特別視を強める要因となっていることが明らかとなった。

「やっぱその意見がつけて良いものにするためにはやっぱ、まあ自分と立場が似てる *m* に言うのが良いかなって思いますね (対象者 *M*)」。

「もっと、自信もつても良いのになつていうのは思ったりしますね。まあそれで、励ますって言うか、大丈夫だよって言うても嫌な感じはないんですけど。それが何か、うーん、勿体ないって感じですね (対象者 *K*)」。

このように、互恵的依存群では依存対象との間に否定的な出来事が生じても、それによって関係が揺るがされることはなく、その体験を肯定的な方向へ転換させる安定性と柔軟性を有していることが示唆された。【誠実性】は依存対象に対し、真心をこめて接することを示す。また、誠実に接することが依存対象に対する信頼を表わしている。依存否定群において見られた〔気兼ね〕や〔萎縮〕のように依存対象からの評価に囚われておらず、自他に対する信頼に基づくと考えられる。【互恵的關係】は依存対象との関係が互恵的であり、援助を得ると同時に支援を行うことを望んでおり、そのような関係を肯定的に捉えていることに特徴付けられる。田中 (2006) は互恵意識によって依存と支援の安定したやりとりがなされ、それが対人関係の満足に繋がり、さらに互恵的行動の動機付けとなると述べている。したがって、【互恵的關係】では依存と被依存が依存対象との関係において循環する相互依存を表わすと考えられる。互恵的依存群では自己と対象の分化が達成されており、その上で良好な関係を維持している (【自律性の達成】)。また、依存対象が個人の生活を支える基盤 (【対人関係の基盤】) となっていることから、依存対象の内在化は十分な段階にあると考えられる。北山 (2002) は Fairbairn の理論を用い、成熟した依存期では分化した対象との互恵的關係の達成があり、対等で十分な人間関係が得られる可能性を述べている。互恵的依存群の特徴は互恵的關係と自他の分化であることから、依存性は成熟した段階にあると考えられる。

3. 各群の特徴と対象関係の発達段階との対応

各群の特徴を概観すると、依存性の発達は概ね対象関係の発達と対応していることが推察された。そこで、得られたカテゴリを対象関係の発達段階と対応させた布置図を作成した (Table 9)。この図より、依存性の発達は「依存拒否」の上昇・低下と対象の内在化によって説明されると考えられる。依存性の発達過程では、喪失と分離に対する過剰反応や潜在的な分離不安において「依存拒否」は高まり、対象の内在化がなされるに従って「依存拒否」は減少する。対象の内在化がなされ、そこから生じる安心感が「統合された依存性」の基盤となる。対象の内在化がなされるためには、対象分散群で見られたように【関係への満足】が得られ、〔自己の相対視〕が確実感を伴ってなされる必要がある。対象の内在化にしたがい、自他に対する安定感が強まり、「統合された依存性」が高まる

と考えられる。

Table 9
対象関係の段階と各様態のカテゴリの対応表

発達段階	2	3	4	5	6	7
	分離不安	喪失と分離に 対する過剰反 応	潜在的な見捨 てられ不安	対象の内在化	対象恒常性の 確立	良好な対象恒 常性
依存否定群		[密着][萎縮] [気兼ね] [過剰依存]	[個の主張][依存 への葛藤][否定 的一面の表現]	[助力への喜 び][理解されて いる感覚]		
対象分散群			[懸念][諦め]	[個の保持][自己内緩和][依存対 象以外の支え][自己の相対視][理 解されている感覚]		
互恵的依存群					[対人関係の基盤][誠実性][相互 成長][相互自立][相互尊重]	

注: グレーの部分は面接法における対象関係の評価 (Bellak, 1973) から、対象恒常性の項目を抜粋したものを示す。表中の数字 (2~7) は対象恒常性の段階を表し、数字が大きいかほど対象恒常性が発達していることを表す。段階1は省略した。

総合考察

1. 本研究の成果

本研究では、依存対象に注目し、各依存性様態の対人関係上の特徴と依存対象との関係のあり方や心理的適応との関連を検討した。さらに、対人関係の特徴から、各依存性様態の対象関係の発達段階の考察を行った。

その結果、依存否定群では揺さぶられ易さやその反動としての自立への試みなどの不安定な関係のあり方が見受けられた。そのため、依存対象と適度な心理的距離を保つことが難しく、依存対象との関わりの中で不満や不安、葛藤などのネガティブな体験をしていることが推察された。これらの体験が心理的適応や関係評価に負の影響を及ぼしたと考えられる。依存否定群の対象関係は潜在的な見捨てられ不安や対象恒常性の危うさが捉えられたことから、対象関係の発達段階は十分でないことが推察された。

対象分散群では依存否定群と比較し、より自他の分化がなされ、他者視点を維持しながら依存対象と関係を築く力の高まりが見られた。また、依存対象との関係において自己の相対化が肯定的になされており、自己感の基盤となることが推察された。また、この群では依存対象との関係による依存性の質的差異が顕著であった。この差異は依存性の発達変容過程を表すものだと考えられる。そのため、個人の依存性を捉える際には数量的な大小関係だけではなく、依存性を表出、あるいは抑制する機序を理解することが重要であると示された。

互恵的依存群では、肯定的自己感を基盤に自他の分化が進み、自律性の保持と相互尊重がなされていた。密着欲求や融合の恐怖を感じることなく依存対象と関係することが可能であり、適切な自己境界を築いていると推察された。さらに、依存対象は個人の生活を支える対人関係の基盤となっていることから、対象の内在化が十分になされた段階にあると考えられる。心理的適応や関係評価

の良好さは、このような対象の内在化によってもたらされたと考えられる。

このように、本研究では依存性様態と対象関係の成熟が概ね対応することが示唆された。そのため、表面的に現れる依存欲求や依存行動の背景には対象関係が関連していると考えられる。したがって、不適応的な依存に対して臨床的援助を行う際には、対象関係の視点が役立つと考えられる。今後はより多面的な視点から依存性様態を理解する試みが必要である。有用な視点として、他者との関係性に焦点を当てたアイデンティティ発達の観点等が挙げられる。

2. 今後の課題

本研究の課題として、以下の4点が挙げられる。1点目は、依存対象との関係の問題である。本研究は個人が最も依存性に向ける対象に焦点を当てたため、依存対象との関係は統制しなかった。そのため、関係による依存性の質的差異の検討が十分ではない。2点目は群の偏りの問題である。本研究において依存否定群は全体の約過半数を占めた。研究2では依存否定群の対象関係の問題が指摘されたが、一般大学生に大半にこのような問題が該当するとは考え難い。自立への過渡期である青年期において依存拒否は高まる(関, 1982)という知見からも、依存を拒否する態度が必ずしも否定的な意味を持たないことが推察される。したがって、今後は対象者を拡大した上で、より詳細な群分けを行うことが求められる。3点目は本研究が扱った側面の問題である。対象関係とは「関係性の表象」であり、現実の対人関係と密接に関わるものの、表面的にはさまざまな形をとって表れ、一見相容れない行動が併存することもある(藤山, 2002)など、本人の意識下で作用する働きである。本研究では依存対象を「現在、関わりのある人物」と設定し、特定の人物を選択させた。そのため、依存対象との関わりは意識化された次元ものであり、個人の対象関係がどこまで反映されたかは定かではない。したがって、今後は質問方法を工夫したり、投影法を併用する努力が求められる。4点目は時制の問題である。本研究では現在の依存対象との関わりに焦点を当てたため、依存性の発達過程からの検討がなされていない。今後は回顧法を使用し、これまでの重要他者との関係やその変遷を辿ることで、より青年期における依存性の理解が深まると考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association (1994). *Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV*. Washington, D.C.: Author. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (1995). DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引, 医学書院)
- Bellak, L., Hurvich, M. & Gediman, H.K. (1973). *Ego functions in schizophrenics, neurotics, and normals. : A systematic study of conceptual, diagnostic, and therapeutic aspects* New York: Wiley.
- D・W・ウィニコット 牛島定信(訳) (1977). 情緒発達の精神分析理論 現代精神分析双書第II期 岩崎学術出版社 (Winnicott, D.W. (1965). *Maturational processes and the Facilitating Environment : Studies in the theory of emotional development*. London: Hogarth Press.)
- 江口恵子 (1966). 依存性の研究 教育心理学研究, 14, 45-58.
- 藤山直樹 (2002). 対象関係 小此木圭吾・北山 修(編) 精神分析辞典 岩崎学術出版社

- 橋本 剛 (2005). ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と妥当性・信頼性の検討, *心理学研究*, **74**, 276-281.
- 井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子 (2006). 日本における青年期用対象関係尺度の開発 パーソナリティ研究, **14**, 181-193.
- 石井辰典・竹澤正哲 (2011). 重要他者の意味尺度の作成 上智大学心理学年報, **35**, 51-59.
- 勝谷紀子 (2006). ネガティブライフイベントへの不適応的な対処行動：重要他者に対する再確認傾向の役割, *社会心理学研究*, **21**, 213-225.
- 金子周平 (2006). 「重要な他者の焦点化」に関する技法と研究の比較検討：ロール・レタリング、内観療法を中心とした文献レビューから, *九州大学心理学研究*, **7**, 89-96.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 *社会心理学研究*, **19**, 59-76.
- 北村 修 (2002). 精神分析と対象関係論 *日本心療内科学会誌*, **6**, 73-76.
- 久米禎子 (2001). 依存のあり方を通して見た青年期の友人関係：自己の安定性との関連から *京都大学大学院教育学研究科紀要*, **47**, 488-499.
- 前盛ひとみ・岡本祐子 (2008). 重症心身障害児の母親における障害受容過程と子どもの死に対する捉え方との関連——母子分離の視点から——, *心理臨床学研究*, **26**, 171-183.
- 松尾将作 (2006). 早期二者関係の発達の展開をめぐる心理力動的考察 *甲子園大学紀要*, **34**, 203-209.
- 森田 薫 (2003). 青年期におけるソーシャル・サポートと主観的幸福感との関連——対象関係の視点を加えて—— *九州大学心理学研究*, **4**, 167-175.
- 永田彰子・岡本祐子 (2008). 重要な他者との関係を通して構築された関係性様態の特徴：信頼感およびアイデンティティとの関連, *教育心理学研究*, **56**, 149-159.
- 中西佳恵 (2010). 青年期の親密な二者関係における境界例的な心性について *心理臨床学研究*, **27**, 653-663.
- 西川隆蔵 (2000). 対人依存行動の研究——依存行動についての適応的観点からの検討課題—— *帝塚山学院大学人間科学部研究年報*, **2**, 1-17.
- 西川隆蔵 (2003). 対人依存行動の研究——対人依存の自己制御と自己意識, ソーシャルスキル, 及び対人適応感との関係の検討—— *帝塚山学院大学人間文化学部研究年報*, 1-19.
- Parents, H. & Saul, L.J. (1971). *Dependency in a man: A psychoanalytic study*. New York.: International Universities Press.
- Hirdchfeld, R.M.A., Klerman, G.L., Gough, H.G., Barrett, J., & Korchin, S.J. (1977). A measure of interpersonal dependency. *Journal of Personality Assessment*, **41**, 610-618.
- Bornstein, R.F. (2005). The dependent patient: diagnosis, assessment, and treatment. *Professional Psychology: Research and Practice*, **36**, 82-89.
- Bornstein, R.F. & Languirand, M.A. (2003). *Healthy dependency leaning on others without losing yourself*.

New York.: Newmarket Press.

- 佐々木新・島田 修 (2000). 大学生におけるソーシャルサポートの互惠性と自尊心の関連 川崎医療福祉学会誌, **10**, 249-254.
- 清水裕士・大坊郁夫 (2005). 恋愛関係における関係性認知が精神的健康に及ぼす影響 対人社会心理学研究, **5**, 59-65.
- ジョンソン F. A. 江口重幸・五木田紳 (訳) (1997). 「甘えと依存」——精神分析的・人類学的研究—— 弘文堂 (Johnson, F. A. (1993). *Dependency and Japanese socialization psychoanalytic and anthropological investigation into AMAE*. New York : New York University Press.)
- 関智恵子 (1982). 人格適応面からみた依存性の研究：自己像との関連において，京都大学教育学部心理教育相談室，臨床心理事例研究, **9**, 230-249.
- 高橋恵子 (1968). 依存性の発達の研究 I：大学生女子の依存性，教育心理学研究, **16**, 7-16.
- 高橋恵子 (2010). 人間関係の心理学—愛情のネットワークの生涯発達— 東京大学出版会
- 滝川一廣 (2004). 新しい思春期像と精神療法 金剛出版
- 竹澤みどり・小玉正博 (2006). 適応的な依存とは？：依存概念の再検討 筑波大学心理学研究, **31**, 73-86.
- 田中 優 (2005). 互惠的相互依存関係に関する予備的研究，大妻女子大学人間関係学部紀要，人間関係学研究, **6**, 223-233.
- 田中 優 (2006). 互惠的相互依存過程モデルの提案，大妻女子大学人間関係学部紀要, **8**, 1-19.
- 田中 優・高木 修 (1997). 中学生における社会的依存要求の特徴について，社会心理学研究, **12**, 151-162.
- 山田みき・岡本祐子 (2008). 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ：対人関係の特徴の分析 発達心理学研究, **19**, 108-120.
- 脇本竜太郎 (2008). 自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響，実験社会心理学研究, **47**, 160-168.